# 日記紀行集

全

# 回記紀行集

全

昭和四年一月十二日印刷
昭和四年一月十五日發行

有朋堂文庫
日記紀行集（非賣品）

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地　塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦捷一

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地　有朋堂印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

不許複製

性器に底なければ云々―天性しつかりしたる所なく、藝能を修むるに身に留まらずとの辭
投身の云々―身を淵に投ずるの決心もつき難し
笑を折りて―首陽山に蕨を折りたる伯夷叔齊の故事
臨める―目前に差迫りたる
窓の螢も云々―車胤の故事、學習せざるをいふ

# 海道記

源光行

白河のわたり中山の麓に、閑素幽栖の佗士あり。性器に底なければ、能をひろひ藝をいるゝにたまるべからず。身運は本より薄ければ、報をはぢ、命をかへりみて、恨をかさぬるに所なし。徒に貪泉の蝦蟇となりて、身を藻によせて力なき音をのみなき、空しく窮谷の埋木として、意樹に花たえたり。惜からぬ命のさすがに惜ければ、投身の淵は胸の底に淺し。存ずるかひなき心は、なまじひに存じたれば、斷腸の棘は愁の中に茂り、春は蕨を折りて臨める飢をさゝふ、伯夷が賢にあらざれば人もとがめず。秋は菓を拾ひて貧しき病をいやす、美子が藥も未だ飢ゑたるをば治せず。九夏三伏の汗は拭ひて苦しまず、手中に扇あれば、涼を招くにいとやすし。立冬素雪の嵐は凌ぐに能はず、身のうへに衣なければ、寒をふせぐにすべなし。窓の螢も集めざれば、目は暗きが如し、何を

憂を忘れん—諺に「酒は憂の玉箒」

しらぬ翁—我容貌の我知らず老いたるをいふ

鶴鬢—白髪の鬢

衣の裏の珠—佛法に所謂衣珠喩如來の方便開示によりて大乘の果を證得する喩

旦暮の露の身—老いて死の迫りたるはかなき身

遺怠とおこたる—音訓を重ねていへる也、以下にも此類例多し

鵝眼—鳥目、ぜに

靡牙—米、其白きを喩へいふ

見てか志をやしなはん。樽の酒も酌む事を得ざれば、心に常に醒々たり、いかゞ憂を忘れんや。然る間、歳の水早く流れて、生涯はくづれなんとす。留むとすれども留まらず、五旬の齢の流、車坂に下る。朝に馳せ暮に馳す、日月の廻の駿駒の隙、鏡の影に對居て、しらぬ翁に恥ぢ鑷子を取つて白絲をあはれむ。是によりて、佛のうへには齢をおどろかす老をつけ、鶴鬢のほとりに早落をいとふ花、露におどろき霜を厭ふこゝろざし忽に催して、僧を學び、佛に歸する念やうやくにおこる。名利は身に棄てつ、稠林に花ちりなば、學樹の菓は熟するを期すべし。薜蘿は肩にすがり、法衣の色そみなば、衣の裏の珠は悟る事を得つべし。旦暮の露の身は、山かげの草をおき所とすれども、朝霞は望絶えて、天を仰ぐに空し。世を厭ふ道は貧道より出でたれども、佛を念ずる思は遺怠とおこたる。四聖の無爲を契りしも、一聖猶頭陀の道にとどまりき。ひとへに己が有爲をいとひ貪り、己いよ〳〵坐禪の窓にいそがし。然して曹腊が酒も人を醉してよしなし、子窄が賄は心に賄へて身の樂みとせり。鵝眼なけれど、天命の路に杖つきて歩みをたすく。靡牙はかけたれども、地恩の水に口すゝぎて渴をうるほす。空腹に一盃の粥をすゝれば餘味あり。薄紙百綴の衿、寒に服すれば肌を暖むるに足れり。檜笠をかぶり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鹿澁苑、築渦州—共に佛典に出で、中心樞要の地たるに喩ふ

百歩の柳—史記に「楚有養由基者、善射者也、去柳葉一百歩而射之、百發而百中之」とある故事

去年云々—鎌倉の事は舊數年來耳に聞き口に上せ心に思ひながら未だ旅程に登らずとの意なるべし

五更—午後四時、早朝の意

あへずして—名殘も惜みあへずして

九重の寶塔—東大寺の塔

松—たいまつ

て裝とす、出家の身なり。藁沓をふんで駕とす、遁世の道なり。そも〳〵相摸國鎌倉の郡は、下界の鹿澁苑、天朝の築渦州なり。武將の林をなす、萬榮の花萬にひらけ、勇士道に榮えたり、百歩の柳百たび中り、弓は曉月に似たり、一張そばだちて胸をたふし、劍は秋の霜の如し、三尺たれて腰すゞし。勝闘の一陣には、爪を楯にして仇を雌伏し、猛豪手にしたがへて直に雄稱す。干戈威をいつくしくして、梟烏敢てかけらず。誅戮にきびしくして、虎おそれをまし、四海の潮の音は、東日に照されて浪をすませり。貴賤臣妾の往還する多く、驛の路隣をしめ、朝儀國務の理亂は、萬緒の機かた〳〵に織り、去年質耳外に聞をなして、おほくの歳をわたり、舌の端脣して、いくばくの日をか送るや。心の船洋爲に漕ぎ、未だ海道萬里の波に棹さゝず。乘馬あらましに馳す、いまだ關山千程の雲にむちうたず。今便人の芳緣に乘じて、俄に獨身の遠行を企てり。貞應二年卯月の上旬、五更に都を出でて、一朝に旅立つ。昨日はすみわびて、鳳はしかりし宿なれども、今立別るれば名殘をしく覺えて、しばしやすらへども、鐘の聲明けゆけばあへずして、いつまた粟田口の堀道を南にかいたをりて、相坂山にかゝれば、九重の寶塔は北の方にかくれ、又相坂を下に松をともして過行けば、四宮河原のわたりはしゝのめに

後堀河

いかる—下に相貌と補ふ

後路山さかりて—來りしうしろの路は山に距てられ遠くなりて

斜陽—夕日

臘雪—去冬の雪

むかしの跡—伊勢物語「駿河なる宇津の山邊の現にも夢にも人に逢はぬなりけり」

行々として—古詩十九首勞頭の句

抖擻—行脚

通りぬ。小關をうち越えて、大津の浦をさして行く。關守の門をだに顧れば、金剛力士忿怒のいかる、眼を驚かし、勢田の橋を東にわたれば、白浪瀧落ちて流呑とながれ、又身をひやす。湖上に船をのぞめば心興にのり、野庭に馬をいさめて手に鞭をかなづ。漸くに行くほどに、都をはるかに隔てぬ。前途林幽なる、纔に青蓼梢にみゆ。後路山さかりて、白雲路をうづむ。既に斜陽影くれて、暗雨しきりに笠にかゝる、袖をしぼりて、はじめて旅のあはれを知りぬ。其間山館に臥して露より起く、曉の望蕭々たり。煙高卑千巖の路をうづみ、水に臨みてまた水に臨む。波の淺深、長堤の汀にすゝむ。濱名の橋の橋下には、往事をちかひてこゝろざしをのべ、清見がせきの關屋には、あかぬ名殘をとどめて歩をはこぶ。富士の高根に煙を望めば、臘雪宿して雲ひとりむすび、宇津の山路に蘿を尋ぬれば、むかしの跡夢にして風の音おどろかす。木々の下には、下ごとに翠帳をたれて、行客の苦みをいこへ、夜々の泊には、とまり毎にこも枕をむすびて、旅人の眠をたすく。行々として重ねて行々たり、山水野塘の興こそ觀をまし、歷々として更に歷々たり、海村林邑の感いやめづらかなり。此道若四道の間に逸興の勝れたるをかね、又孤身が抖擻の今旅はじめなれば、遇孤たる舊客猶ながめを等閑にせず。況や

不定の再覲―再び老母に見えん事のいつと定めなきをいふ

湯井―由井、餘倉西郊の海岸

萍實、桂花―太陽、月

今日明日とも知らぬ―いつ死ぬかも知れぬ

あふみ―逢ふ身、近江

形をほゆ―「一犬形に吠えて萬犬虚に吠ゆ」の語に依る

一生の新賓なれば、感思おさへがたし。感思の中に愁傷の交る事あり、所謂母儀の老を口、又いとけなきを都にとゞめて、不定の再覲をちぎり置く。無狀かな愚子が爲體、浮雲に身を乘て旅天にまよひ、朝露の命にて風のたよりにたゞよふ。道を同じうするものは、我を知らざる客なり。語は親昵に契りて、いづちか離れなんとする。長途に疲れて十日あまり、窮屈しきりに身をせむ。湯井の濱にいたりて一時半偃息、しばらく心をゆるぶ。時に萍實西にしづむ、舊里を忍びて後を期し、桂花東にひらけ、外鄕に向つて中懐を惱ます。仍三十一字を綴りて、千度思ひ萬度懐ひて、旅の心ざしをのぶ。此は是文を以てさきとせず、歌を以て本とせず、たゞ興にひかれて、物のあはれを記するのみなり。四月四日の曉、都出でし朝より雨にあひて、勢田の橋のこなたにしばらくとまりて、雨じたくしてゆく。今日明日ともしらぬ老人を、ひとり思ひおきてゆけば、

思ひおく人にあふみのちぎりあらば今かへりこん瀨田の長橋

橋のわたりより雨まさりて、野徑の道芝露殊に深く、八町畷を過ぐれば、行人たがひに身をそばめ、一邑のさと通れば、亭犬頻に形をほゆ。今日しもならはぬ旅の空に、雨さへいたく降りて、いつしか心のうちもかき曇るやうに覺えて、

存外―原本「本のまゝ」と傍注せり
ゑぐ―野菜の名、根に小さき芋ありて味ゑぐきものといひ、又、芹の一名ともいふ
蓑毛―鷺の頭に亂れ垂れたる羽毛
白楡のかげ―白楡といふ星の名古樂府に見ゆ、夜間の意なるべし
緑林―盗賊
廬山の云々―白氏文集十七、廬山草堂雨夜獨宿の詩にて「蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」とあるをいふ

旅衣まだ著もなれぬ袖のうへにぬるべきものと雨はふりきぬ

田中うち過ぎ、民宅打過ぎて、はるゞと行けば、農夫並び立ちてあら田をうつ。聲は行雁のなき渡るが如し。卑女うちむれ、前田の面にゑぐつむ。存外しづくに袖をぬらす。そともの小川には、河ぞひ柳に風たちて、鷺の蓑毛うちなびき、竹の編戸の垣根には、卯花咲きすさびて、山時鳥忍びなく。かくて三上の嶽を望みて、野洲河をわたる。

いかにしてすむやす川の水ならんよ渡るばかり苦しきやある

若椙と云ふ所を過ぎて横田山を通る。此山は白楡のかげにあらはれて、緑林の人をしきる所とも聞ゆれば、益なく覺えていそぎ行く。

はや過ぎよ人のこゝろのよこた山みどりのはやし陰に隱れて

夜景に大岳といふ所にとまる。年比うちかなはぬありさまに思ひとりて、髪をそりければ、いつしかかゝる旅寐するも哀にて、かの廬山の草菴の夜曲は情ある事を樂天の詩に感じ、此大岳の柴の宿の雨には何事を貧道の歌にはづ。

すみぞめの衣かたしき旅寐しついつしか家をいづるしるしに

五日、大岳を立ちて遙に行けば、内の白河外の白河と云ふ所を過ぎて、鈴鹿山にかゝる。

山よりは伊勢の國にうつりぬ。重山雲さかし、越ゆれば千丈の屏風彌しげく、群樹煙ながし、褰ぐればまた萬尋の帷帳ますゝあつし。峯には松風かたくに調べて、嵇康が姿しきりに舞ひ、林には葉花稀に殘りて、蜀人の錦は纔にちりぼふ。是のみにあらず、山姫の夏の衣は、柑の綠にそめかけ、樹神の音の響は、谷の鳥にこたふ。此路を何里ともしらず越え行けば、羊腸坂きびしくして、駑馬石に足なえたり。すべて此山は、一山の中に數山をへだてゝ千巖の峯にさはり、一河のながれ百瀨に流れて衆客の歩みに足をひたせり。山里江複は當路に有りといへども、萬里の行者はなかばもいたらず。

鈴鹿川ふるさと遠く行くみづに濡れていくせの浪をわくらむ

薄暮に鈴鹿の關屋にとまる。上弦の月峯にかゝれり、虛弓いたづらに歸雁路にのこり、下流の水谷に落ち、奔箭すみやかにして、虎に似たる石にあたる。爰に旅驛漸くにかさねて、枕を宿緣の草にむすび、雲衣曉にさむし、袖を岩根の苔にしく。松は君子の德をたれて、天の如くおほへり、竹は吾友の號あれば、風に臥して夜をあかす。

鈴鹿山さしてふるさとおもひねのゆめ路のすゑに都をぞとふ

六日、孟嘗君が五馬の客にあらざれば、函谷の鷄の後、夜をあかしてたつ。山中なか

---

嵇康が姿―松をいふ、朗詠に「千丈淺雪應」嘯嵇康之姿、百步亂風誰破養由之射」

蜀人の錦―紅葉をいふ

山里江複は當路に有り―宋詩「山重水複疑無路」の句の飜案か、山里は山重の誤にや

虛弓―弓張月

竹は吾友―朗詠に「唐太子賓客白樂天、愛竹爲吾友」友の字原本丈とあれど今改む

函谷の鷄の後―關所の門も開き

て後、孟嘗君の客能く鷄鳴を爲して函谷關を夜中に出でたる故事

仁者、智者―論語の「仁者樂山智者樂水」の語に取る

東作―農作

西收―秋の取入れ

劉寛―漢の華陰の人、字は文饒、性仁厚也、桓帝の時南陽太守に遷る、吏民過あれば但蒲鞭を用ひて辱を示すのみ終に笞を加へず

蒲鞭云々―朗詠「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不驚」

ば過ぎて漸く下れば、巖扉けづりなせり、仁者の栖、しづかにして樂み、澗水掘ながす、智者の砌、うごけどもゆたかなり。かくて邑里に出でて、田中の畔を通れば、左に見右に見、立田渺々たり。或は耕し己がひき〳〵に論じ、畦畝あぜを竝べて、苗を我とりどりに藝ゑたり。民の煙は父君心髓の恩火よりにぎはひ、王道の德は子民稼穡の土器より開けたり。水龍は本より稻穀を護りて夏の雨をくだし、電光はかねてより九穗をはらみて三秋をまつ、東作の業力をはげます、西收の稅たのもしく見ゆ。劉寛が刑を忘れたり、蒲鞭定めて螢に成りぬらん。

苗代の水にうつりて見ゆるかないなばの雲のあきのおもかげ

日數ふるまゝに古鄕も戀しくて、立ちかへり過ぎぬる跡をみれば、いづれか山いづれか水、雲より外に見ゆるものなし。朝に出でて夕に入る、東西を日の光にわきまふといへども、晩ればとまり明くれば立ち、晝夜を露命に論ぜん事は難し。おのづから一歩を捨てて萬歩をはこばゝ、遠近かぎりありて往還を期しつべし。只あはれむ、遙に都鄙の中路に出でて、前後の思に勞する事を。

ふるさとは山のいくへにへだて來ぬ都の空をうづむしらくも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

河伯、山祇―河の神、山の神、山川の地形をいふ、朗詠に「草木扶疎春風梳山祇之髪、魚鼈遊戯秋水養河伯之民」

つながぬ駒云々―美景に心のはださるゝ喩

難面―しやアしやアとしたる、諺に「蛙のつらに水」さして―格別、棹の縁語

桑の下宅―貧しき農家、桑戸、桑樞といふ類

潦倒たる―老ぼれたる、罷鐘潦倒の略、この語は反切による有名なる謎にて、罷鐘の切、樞潦

夜陰に市腋と云ふにとまる。前を見おろせば海さし入て、河伯の民うしろにやしなはれ、見あぐれば峯峙ちて、山祇の髪風にけづる。磐をうつ夜の浪は千光の火を出し、木々になく曉の鶲は孤枕の夢を破る。此所に留まりて心はひとりすめども、明け行けば友にひかれ打出でぬ。

松がねのいはしく磯の波まくら臥しなれてもや袖にかくらん

七日、市腋を立ちて津島の渡と云ふ所を舟にて下れば、蘆の若葉あをみわたりて、つながぬ駒も立ちはなれず。菱の浮葉に浪はかくれども、難面きかはづはさわぐ氣もなし。とりこす棹のしづく袖にかゝりたれば、

さして物を思ふとなしにみなれ棹みなれぬ浪に袖はぬらしつ

渡りはつれば、尾張の國にうつりぬ。片岡には朝陽の影うちにさして、燒野の草に雉なきあがり、小篠が原に駒あれて、泥みしけしき引きかへて見ゆ。又園中に桑の下宅あり、宅には蓬頭なる女、簀にむかひて蠶養をいとなみ、園には潦倒たる翁、鋤を持て農業をつとむ。大かた禿なる小童部といへども、田を習ふ心ざし、たゞ足を泥とする思のみあり、若くしてより業を習ふ有さま、あはれにこそ覺ゆれ。實に父兄の教つゝしまざれ

倒の切「老」即ち老羸癈疾をいふ也
夏引の―糸より幼きに掛る
示現利生の垂跡―本地印度の佛の形を此土の神と現じて生民に利益を與へたるをいふ
阿字門を觀ずれば―阿字は梵語の第一字母にして阿字本不生の深理を示觀するものなりと稱す、この本不生の阿字を觀ずるを阿字觀といひ、之に體達せるを阿字門に證入したる者といふ也
羊質未參―不才にして未だ道に參せず
向前、向方―眼

ども、主孝の志おのづから相成るものか。

山田うつ卯月になれば夏引のいとけなき子もあしひぢにけり

幽月景あらはれて、旅店に人しづまりぬれば、草の枕をしめて、萱津の宿にとまりぬ。八日、萱津を立ちて鳴海の浦に來ぬ。熱田宮の御前を過ぐれば、示現利生の垂跡にひざまづきて、一心再拜の謹啓に頭をかたぶく。暫く鳥居に向ひて、阿字門を觀ずれば、權現の砌ひそかに、寂光の色に□。夫れ土木霜降つて、瓦上松風天に吹くといへども、靈驗日新にして、人中の心花春の如くに開けたり。しかのみならず、林の梢枝をたるゝ幡蓋社頭の上におほひ、金玉の檐端をうつ。金色を神殿の面にみがく、かの和光同塵は來際をかざる期なき事を憐む。羊質未參の後悔に向前のうらみあり、後參の未來に向方のたのみなし。願はくは今日の拜參をもちて、かならず當來の良緣とせん。路次の便詣なりといふ事なかれ、此機感相叶ふ時なり。光をまじふるは冥を導く誓なり、明神定めてその名に應じたまはゞ、長夜の明曉は神にたのみあるものをや。

光とづる夜のあまの戸はやあけよ朝日こひしき四方の空見ん

此浦をはるかに過ぐれば、朝には入海にて、魚にあらずば游ぐべからず、晝は鹽干潟な

前と後來と　當來―未來、來世

朝には云々―朝夕潮の干滿の甚しきをいふ

酉天―西方の天

一生の歡會―朗詠に「翠帳紅閨萬事禪法雖異、舟中浪上一生之歡會是同」の句にとる

名をきくしま―蓬萊

煩惱は家の犬―寶物集に「煩惱は家の犬打てども去らず、菩提は山のかせき、つなげども不留」涅槃經に「又如家犬不畏於人」とあるに出づ

友をそむきて―下にひとり在るにと補ふ

漁夫があざけり―楚辭屈原の漁

れば、馬をはやめて行く。酉天は冥海漫々として、雲水蒼々たり。中上には一葉の舟幽に飛んで、白日の空にのぼる。彼侲男の船中にてなどや老いにけん、蓬萊の島は見ずとも、不死の藥をばとらずとも、波の上の遊興は一生の歡會なり、是延年の術にあらずや。

老せじと心をつねにやる人ぞ名をきくしまのくすりをも得れ

猶此干潟を行けば、小蟹ども己が穴々より出でて蠢きあそぶ。人馬の足にあわてゝ、横にをどり平ざまに走りて、我があな〳〵へ逃入るをみれば、足の下にふまれて死ぬべきは、外なる穴へ走りて命いき、外に恐れなきは、足の下なる穴へ走り來て踏まれて死ぬ。憐むべし、煩惱は家の犬のみにあらず、愛著は濱の蟹ふかき事を。是を見てはかなく思ふ、我々かしこしや否や。生死の家に著する心は、蟹にもまさりてはかなきものか。

たれもいかに見るめあはれとよる浪の漂ふ浦に迷ひ來にけり

山重りてまたかさなりぬ、河阻りて又へだたりぬ。ひとり舊里を別れて、遙に新路におもむく。知らず、いづれの日か故鄕にかへらん。影をならべゆく道づれはあまたあれども、心ざしはかならずしも同じからねば、心に準ずる氣色は、友をそむきて似たれども、折にふるゝ物のあはれは、心なき身にもさすがに覺えて、屈原が澤に呻ひて漁夫があざ

夫の辭

楊岐が路―楊朱のわかれ道を見て其以て南すべく以て北すべきを思ひて哭したる故事、淮南子に出づ

逆路―はたごや

吳山の云々―險しき山坂といふにもあらず、廣き大道ながら息は苦しくはずみたりとの意なるべし、周行は詩經卷耳の語にて大道をいふ

雨をきく―松籟の雨の如きをいふ

千年の貞―朗詠「一千年色」中深

一兩―一つ二つ

花はむかしの―伊勢物語業平のこゝにて「から衣きつゝなれにけりを恥ぢ、楊岐が路に泣きて、騷人のうらみをいだきけんも、身のたとへにはあらねども、逆旅にして友なきあはれには、何となく心ぼそく、空に思ひしられて、

露の身をおくべき山の蔭や無きやすき草葉もあらし吹きつゝ

湖見坂といふ處をのぼれば、吳山の長坂にあらずといへども、周行の短息はこゝにあへたり。數歩を通じてながき道にすゝめば、宮道二村の山中を賒に過ぎて、山はいづれも山なれども、優興は此山にひく、松はいづれも松なれども、木立は此松に止れり。翠を含む風の音に雨をきくといへども、雲に舞ふ鶴のころに晴の空を知る。松性々々、汝は千年の貞あれば、面がはりせじ、再往々々、我は一時の命なれば後見期しがたし。

けふすぎぬかへらば又よふたむらのやまぬなごりの松の下路

山中に堺川あり、身は河上に浮んでひとり渡れども、影はみなぞこに沈みて我とふたりゆく。かくて三河國にいたりぬ。雉鯉鮒が馬場を過ぎて、數里の野原に一兩の橋を名つけて八橋といふ。砂に睡る鴛鴦は夏を辭し去り、水にたてる杜若は時を迎へて開きたり。花はむかしの色かはらず咲きぬらん。橋も同じ橋なれども、幾度作りかへつらん。相如が世を恨みしは、肥馬に乘りて昇僊にかへり、幽子身を捨つる、窮鳥に類て當橋を

しつましゐれば はるゝ〳〵きぬる旅をしぞ思ふ」と詠める故事を「春やむかしの春ならぬ」の歌句によりていへる也

蜘手に―伊勢物語八橋の記事に「水はくもでに流れて」とある文にとる

斜脚―斜めなる日あし

酉金―西方

遊女―力蓉

三州吏―三河守大江定基力蓉に別れて後發心して入宋、皇帝に謁し圓通大師の號を賜ふ

渡る。八橋よ八橋よ、蜘手に物思ふ人は、むかしも過ぎきや。橋柱よはしばしらよ、おのれも朽ちぬるか。空しく朽ぬるものは今も又すぐ。

すみわびて過ぐる三河のやつ橋を心ゆきても立ちかへらばや

此橋の上に、思ふことを誓ひて打渡らば、何となく心もゆく樣におぼえて、遙に過ぐれば、宮橋といふ所あり。數雙のわたし板は朽ちて跡なし、八本の柱は殘りて溝にあり。心のうちに昔を尋ねて、言のはしに今をしるす。

宮橋の殘るはしらにことはん朽ちていく世かたえ渡りぬる

けふのとまりを聞けば、前程なほ遠しといへども、暮の空を臨み、斜脚既に酉金に近づく。日の入る程に矢橋の宿に落ちつきぬ。

九日、矢橋を立ちて赤坂の宿を過ぐ。むかし此しゆくの遊君、花顔春こまやかにして、蘭質秋かうばしき女ありけり。貌を潘安仁が弟妹にかりて、契を三州吏の妻妾にむすべり。妾は良人に先だちて世を早うし、良人は妾におくれて家をいづ。しらず利生の菩薩の化現して、夫を導けるか。又しらず圓通大師の發心して、妾をすくへるか。互の善知識大なる因緣なり。彼の舊室妬が呪詛に、抃舞惡怨かへりて善教の禮をなし、異域朝嘲

の輕仙に、鼻酸持鉢忽に智行の德にとふ。巨唐に名をあげて、本朝に譽を留むる、上人誠に貴し。誰かいはん、初發心の道に入る聖なりとは。これ則ち本來佛の世に出でて人を化するにあらずや。行々むかしを談じて、猶々今にあはれむ。

德にとふ―とぶと濁り「富」の義に解すべきか、又何かの誤にや

いかにしてうつゝが道を契らまし夢おどろかす君なかりせば

かくて本野が原を過ぐれば、懶かりし蕨は春の心を生替りて、秋の色疎けれども、分行く駒は鹿の毛に見ゆ。時に日重山にかくれて、月星躔に顯はれぬ。曉をはやめて、豐川の宿にとまりぬ。深夜に立出でて見れば、此川は流れ廣く水深くして、誠にゆたかなる渡なり。河の石瀨に落つる浪の音は、月の光にこえたり。川邊に過ぐる風の響は、夜の色白し。又汀ひなのすみかには、月より外に眺めなれたるものなし。

星躔―星の循行する軌道

石瀨―石多き瀨

ひなのすみか―鄙の住家

しる人もなぎさに浪のよるのみぞなれにし月の影はさしくる

十日、豐川を立ちて、野くれ里くれ、はるゞと過ぐれば、峯野の原と云ふ所あり。日野の草の露より出でて、若木の枝にのぼらず、雲は峯の松風に晴れて、山の色天と一つに染めたり。遠望の感情つきがたし。

山の端は露より底にうづもれて野ずゑの草にあくるしのゝめ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com